
エンドレスゲーム

野田 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレスゲーム

【Nコード】

N0742N

【作者名】

野田 涼

【あらすじ】

傷害をもった学生の戦い

始まりのゲーム

僕その夜見てしまった。僕のクラスの人が、人を襲うところを・。

第一章 眠れない夜

聖北中学校。

この学校は、とても大きい学校。資産があるのか、いろいろ施設がある。運動の施設や病院などなど、この学校普通学校とは、ぜんぜん違った。

僕はこの学校に、通う中学一年生。名前は「ナナシ」髪は結構長い。この名前は自分でつけた。この学校は皆何かの傷害を持っている人しかない。だからこの学校は、多く施設がある。この学校に入る条件それは、体や心に傷害を持つ人のみ入れる。僕は記憶喪失。僕のクラスには、足に傷害を持つ人や、手に傷害を持つ人などなど。皆傷害を持っている。だが僕のクラスには、手も足も何も傷害を持ってないように、見える人がいる。名前は「伊藤 一」クラスの自己紹介も、無表情で、口数も少なかった。見ている限り・・・彼は、友達もいない。ときどき上級生にも呼ばれて校舎裏に行っている。

髪がサラサラで、片方の目をいつも閉じている。そしてとても中学生には見えない童顔で幼児体型。いつもなぜ閉じているのだろうと思うっている。目を傷害持っているなら、眼帯とかつけていると思う。

今日の放課後。

僕はとても疲れていた。今日は七時間もあつたからである。この前の休みのせいで、学校側も授業時間を増やさないと、勉強ができないらしい。

「ナナシ、帰ろうぜ」

龍崎がはつきりと言った。彼は、僕の友達。名前は「橘 龍騎」彼は、耳がよく聞こえない。だから大きな声で話さないと、応答をしないときがある。髪がツンツンで普通の人だ。奇妙なことに今日

は何も持ってきてなかった。

「ちよつとまつて。帰る準備するから。今日いろいろとあつて、まだ準備してない」

僕が龍崎に言った。

龍崎は、不満そうな顔した。僕が準備する間、龍崎は何も持っていなかったから、何か口笛で歌っていた。

唐突に聞いた。

「なんで今日は何も持ち物を持っていない？普通は筆箱とか、教科書とかがあるはずだろ？まさか置き勉・・・？もしそうなら、明日テストだぞ。もどつたほうがいいぞ。」

今は学校から離れて一キロ程度、もどるのはとてもめんどくさい。「そうだったけ？」

龍崎は、汗をかいて、あきらかに顔に出ている。まるで、嘘をついて、その嘘がばれて嘘を嘘重ねて、ついにばれた時のような顔だ。「今日どこかの喫茶店いつて勉強でもするか？学校にもどるのめんどいし」

僕は、友達のためにただ提案しただけだったはずなのに。友達は、「ありがとう、友達。本が読み放題の喫茶店で、勉強するのはどうだ？」

素直に応答して、お礼を言つて一緒にすることを賛成した。

「それでいいな」

僕もそれに賛成して、応答した。

友達と話すのなんて、いままであり得ないと思っていた。記憶喪失で、何も覚えてない。

なにも話すことがない。ただそれはなに？あれはなに？と聞くだけだった。みんなあきれた顔するだけだった。今までずっとそうだった。鉛筆や、消しゴム、電気、車、何も覚えてない。自分の名前も知らなかった。そんな僕が、いま友達と話している。「勉強をするのめんどいなあ」

龍崎がつぶやいた。たしかに心の中では、僕もそれは賛同したが、

僕が言った言葉違った。

「何を言っている。おまえ勉強しないとだめだ。高校や就職だって困るぞ。おまえ前のテスト偏差値と順位いくつだよ？」

これは友達のことを思っていたのかは、わからないまま言った。

「それはな・・・」

龍崎は、しゃべるのをためらいながらしゃべっている。それはまるで逃げ場がない、おうすぐ死ぬ動物みたいだった。

「いくつだよ？」

龍崎は小さな声で言った。本当に逃げ場がない動物があきらめたように。

「・・・五十八位。偏差値は四十五」

僕はあきれた顔した。

「おまえな。こちら辺の学校最低偏差値四十八だぞ。そのままといけないぞ。だから勉強しないとだめだ。だいたいな半分より下の時点でやばいんだ。高校行きたくないのかよ？」

龍崎は即答した。気持ちがそれしか考えていなかったのかはわからないが、すぐに言った。

「行きたいさ。勉強する気が出ないんだよ。」

龍崎は小さく言った。僕は、思った人間は自分で考えればやる気になるが、人にやらされる、人に言われてやるのはなんとなくいやだ。

「明日のテストが終わったら一緒に勉強するか？」

龍崎が喜んだ！僕はそこまで喜ぶことか？そりゃ一人でやるよりは二人の方がいいが。

そこで、一言。

「毎日な。毎日」

龍崎はかたまった。まるで一度希望が与えられたが、また絶望が襲ってきたようになっていく。

「いやちよつとまってくれよ。何時間勉強するんだよ。めっちゃつらいぞ。俺が勉強で集中できる時間は一時間だぞ」

龍崎はめっちゃあせている。僕は、焦る必要もない。ただ友達のために時間を使うだけだ。そう、友達のために。

「おまえな。学校で何時間勉強しているんだよ？」

僕が質問した。これは、僕の中ではアメをやってからムチをやったつもりだ。

「それは……。ほら俺授業中寝ているし」

僕の頭が痛くなった。ムチで相手を困らせるつもりが、僕が困ってしまった。それは、僕が考えてないことだったからだ

「おいまてよ。それじゃ評定まで、あぶないじゃないか。おまえの隣のやつに、起こすように言っておくか」

そこからアメなどなしで、ムチで龍崎を、ずっと説教した。僕が長々と説教して龍崎と別れた。龍崎もよく心にしみたと思った。

龍崎と別れたあとだった。

そのできごとは……。真夜中におきた。

ただの公園だった。真夜中だから、別に不気味とか、そういうのではなかった。公園にだれかがいる。けんかをしている。あれ倒れ込んだぞ……。僕は疑問に思った。片方はなにもしてないのに、殴っているほうが倒れたのだから。駆け寄った。そしたら急に、倒れてない人が走っていった。すこし見えた。あの髪の毛サラサラで目が青と赤……。？

倒れている中学生の首をよく見たら……。

「首に何か指した跡がある。よく小説とかで見る。これは吸血鬼に吸われたあと！走っていった人は、自分と一緒に、化け物じみた力が……」

今日の夜は眠れなかった。今日の出来事が怖かった……。そんなはずじゃない。ずっとクラスメイトが走っていた人じゃないかと考えていた。走っていた人は、髪がサラサラで目が青と赤だった。あれは、一だったじゃないかと思ってしまった。でも片方の目が閉じ

てなかった。目が赤と青だった。あれは一じゃない。きつと一じゃない。一じゃない。とずっと心の中で、思っていた。気がつけばいつの間にか朝になっていることが、気がついた。

第二章 学校で・・・

部屋から出て速攻で朝飯を食って学校に向かっていた。常に走っていた。頭にはあのことしかなかったのだ。夜眠れなかった。あの真相が聞きたい。僕の心にはそれしかなかった。学校ついたら、教室に僕は向かった。みんなをどけて。

「おい！ナナシ」

龍崎が言っているも自分は無視した。それ以上に自分は、一のことしか頭になかったのだ。昨日のことを早くきっちり聞いておきたい。そうしないと心がおさまらない。

「おい。ー」

自分は大声で叫んだ。周りにはびくりしている。委員長に止められても一の方に向かっていた。

「ー。ちよい校舎裏来い」

一は、ただうなずいてついてきた。一は、いつも通り歩いていた。聞きたいことがある。聞いてもいいか？」

一は、うなずいた。

「おまえ昨日公園にいたか」

一は、横にふった。

「本当か？」

一は、うなずいた。顔色変えずに、全く同じ表情で、かわらないしぐさだった。

「ならいい。今日はすまなかった。いきなり叫んで。」

一が、しゃべった。僕は始めて聞いた感じがした。

「だれにだって疑問はある。そのことが頭にしかないからって友達を無視したらいけないよ」

え、心の中で思った。あいつがなぜ？僕が友達を無視したこと知っている！

不思議なことが学校でおこった。

第三章 戦い

僕は家に帰ってからずっと考えていた。なぜあいつは、僕が友達を無視したこと知っていた。あいつのいつもの眼の色は、黒。ただ僕が見たやつは、眼の色が赤と青、それで髪がサラサラ。たったそれだけしか知らない。明日また聞いても同じことしか言わないだろう。僕は何を思っているんだ。なぜクラスメイトが化け物じゃないかと思っている。最低だ。最低だ。僕は最低だ。

気分が悪い。チャットで愚痴でも言うか。

「こんにちは」

今日一人しかいないか……。まあいいや聞いてもらおう。

「昨日不思議なことがあったんですよ。聞いてください。神さん（神はハンドルネーム）」

僕は思っていた。神とか、自意識過剰の人しかつかないだろ。

「え、何々？きいてみたいかも。ってか神はどんな話を聞いてもしっかりと応答して、説明とかしてみるし、って神は答えてみたり」

この人テンション高いな。

「早く早く聞いてみたいって」

「それでは。真夜中にコンビニで物買おうと思っていきました。」

「え シグさんって中学生じゃないの？昨日中学生っていつてなかったっけ？」

痛いところつくな。（シグは自分の名前）

「いやいや、気分を変えようと思ったんですよ。あと話の途中で、割り込まないでくださいね」

「神はわかりました」

ふと、僕は思った。昨日僕ってチャットしていたっけ？この人はまさか……。いやそんなはずはないよな

「人と人がけんかしていたんですよ。二人とも中学生でした。一人が一方的に殴っていた。そのとき殴っていた方が倒れたんですよ。」

駆け寄っていったら、片方の人が逃げていきました。首元に何を指したあとがありました。小説や漫画での吸血鬼かなと思って、そこから逃げました。」

「もしかして逃げていった人って 目が青と赤ではありませんでしたか？」

「そうです。目が赤と青でした。なぜ知っているのですか？」

「それは都市伝説ですよ。じゃあシグさんは、傷害都市の人なんだ。自分と一緒にだね」

傷害都市とは、傷害を持つ人間しかいないところ。

「僕はそんな都市伝説知りませんよ」

「いやいやもうこの都市伝説が起きたのは十年前のことだから。中学生は知らなくて当然だよ」

「じゃあ神さんは二十代ですか？」

「違うな。自分は中学生さ。君と一緒にの学校にいる人だよ」

神さんはログアウトしました。

え。神さんってまさか――？？？今日はもう寝よう。明日聞けばいい……そう明日。

学校ついて朝の会が始まった。先生が突然言い始めた。

「突然のことですが伊藤 一くんは、転校することになりました」

僕はショックを受けた。心の中で後悔している。なぜなぜあのとき聞かなかったのか。とても後悔している。

「ナナシ。一が転校したって誰も悲しまないよな。あいつ友達いなかったし。どうしたナナシ？」

なぜ？自分は考え込んだまま倒れた。

「先生！ナナシが倒れ込みました」

夢の中。

そこには一が立っていた。

「一。おまえは何者だ？」

「それを知りたいなら自分を追いかけてくるといい。自分は今夜中の公園にいる。くるといいさ」

僕は夢から起きた。

「ナナシだいじょうぶか？頭痛くないか？」

そこにいたのは龍崎だった。

「だいじょうぶ。今日はもう帰るわ。先生によろしくといっておい
てくれ。」

「わかった」

龍崎は、うなずいた。

真夜中になった。自分は夢で起きたことを信じて、公園に向かった。

「だれもいない。僕がこんなことあったらいいなと思ってみた夢か。
・・・」

あきらめて帰ろうとした。そのとき上から声がした。

「まってよ！そんな見捨てないでよ」

一の声が聞こえた。一が言ったこと見捨てないで？

「見捨てないでってどういうことだ？」

「こういうことさ」

一が指を指した。

「いまおそわれているんだ。助けてよ。自分の力だけじゃこいつらを倒せないよ」

そこには、化け物がいた。目が一つだけのやつや、腕が百本ぐら
いあるやつ、猫の頭に犬の頭を持つやつがいた。

「きみ力持つてるでしょ。使ってよ」

え、なぜこいつが僕が力を持っていることを知ってる？

「早く早く。」

「しょうがねえな」

ナナシはどんどん目が変わっていく。目が光ってる。まるで猫！

「きみはそんな力か。自分の力を見せてあげるよ」

目が青と赤に変わって、牙出て、それはまるで吸血鬼。

「さーてナナシ君。あいつらを倒そうか」

「倒すってどうやってやるのさ？」

「こつやつて殺るのさ」

一は、空中を舞い、敵の上に乗る。そしてかみついた。かみついたところを離して、戻ってきた。

ナナシは、ただ立っていた。急に敵が倒れ込んだ。あのときといっしょ・・・。

「さーて。ナナシ君、犬と猫の頭を持つ敵を倒してよ」

「無茶言うな。僕はこれにどんな力があるのかも知らないんだぞ。

ただ目が光るだけ、それ以外はどんな能力も。」

一の目が冷酷な目に。

「いいからやつてみてよ。体が勝手に動くから。」
にこりと笑った。

体が勝手に動く？ばかなそんなはずは？

ナナシは、いつのまにか敵の背後にいた。いつのまに！自分でもびつくりしていた。素早くなったのではなかった。相手をよく見たら動いてなかった。1ミリも全く。

「これが猫の能力。目で相手を十秒見ていると、相手が一分間動きが止まる。それが猫の能力。これからおもしろい戦いになりそうだ。」

一が、残りの敵に軽く近づいて吸血して、敵を倒した。

第四章 化物喪失ゲーム

ナナシが聞いた。

「おい。聞きたいこと聞いていいか？」

「うん。いいよ」

「おまえはチャットでの神か？なぜ校舎裏で質問したとき嘘をついた？この力はなんだ？おまえ公園で人間を襲っていたよな？転校し

たおまえがなぜここにいる？」

「質問しすぎだよ。まずは、チャットね。それは僕だよ」

「次に校舎とき嘸ついたのは、チャットで話しておきたかったから。君こと全然知らなかったから。」

「次の質問は、この力は、選ばれしものの印さ。この力は、ある物語に出てくる化け物の力を得るんだ。自分の場合は吸血鬼。血管に牙をさして、血を吸ったり、毒を入れたり。君の力は、化け猫かな？化け猫なら変身だと思っていただけだな。」

ようやくわかった。この力を使ったとき、子供の頃ある子供が一分間動けなかったことがあった。

「次の質問は、あれは人間じゃない別の世界からきた、敵だよ。」

別の世界？？

「次の質問は簡単。転校するのはうそだよ。学校から消えただけさ」

これでまた質問ができた。もう一つの世界。この力はどんな人間が持てるのか、選ばれしものの印を持つ人は何人いるのか

「おい。また質問だ」

「また質問困るよう。話したいことが話せないよ」

「話したいこと？僕の質問が終わったら、話していいよ」

「まあいいよ。答えられる範囲で答えるよ」

「もう一つの世界とはなんだ？この力はどんな人間が持てるのか？選ばしものの印を持つ人は何人いる？」

「もう一つの世界とは、神様が作った世界のこと。そこから化け物を出して、選ばれしものの印をもつ人間が半分減ったら、神様にもう一つの世界に呼ばれる」

「次は、みんな同じ共通点を持っている。なんでしょう？」

僕が持っている共通点・・・そうか。

「傷害か」

「すこし違うね。記憶喪失の人間に選ばれしものの印が与えられる。あと中学生。あと一つは、チャットででてきた単語だね」

チャットででてきた。単語・・・都市伝説？神？吸血鬼？そうか「傷害都市にいる、人間だな」

「その通り。この傷害都市にいる人の数は、たったの二百人弱。この都市は、中学生ばかり。だから七割が中学生らしい。中学生は約百四十人だね。そこから記憶喪失の人だけだから、約七十人じゃないかな？」

ちよつとまで。俺は小学五年生の時にできるようになった。

「僕は小学五年生のときにできるようになったぞ。中学生以外もいるじゃないのか？」

「そうか。きみは小学五年生の時に、ここの傷害都市にきたのか。傷害都市にきたらその力を得るのさ」

「さーておもしろいことになったね。お互い困ってるだろ。自分と組まない？」

はあ 何を言っている？こいつは

「自分と組むためには、転校して、外国行くことにしてね。ちなみに選ばれしものの印を持つ人数が半分になったら、いっしょにもう一つの世界にいくのさ」

「まってくれ。大事なことがぬけている。僕たちが勝って何がもらえる？負けたらどうなる？」

「それはね。負けたら一生記憶が戻らない。神様がそうすることにしている。でもね。勝ったら記憶ももどるし、神様が死んだら次の神様になれる。そして願いが一つ叶う。」

「ふざけんじゃねえ。なんだそれ。僕が記憶を失ったのは、事故がおきたからだ。そのせいで、神様が選んだ。ふざけんじゃねえぞ。」

「おい。願いが一つ叶うんだよな。」

「え、そうだけど。」

「だったら、僕が全員に勝って、負けたやつ全員の記憶をもどすようにしてもらう。」

「じゃあ、君は化物喪失ゲームに参加するんだね。」

「おまえと組んで、勝ちにいつてやるよ。」

第五章 始まり

僕は学校に転校すること告げた。これから非現実なことばかりがおこること。それを決して信じないわけではない。これから記憶を戻して、神様となんか、文句を言つたためだ。

「さてこれからどうするかだ」

いま、あいつもいねえし、いまどうすればいいかわからねえ

「ナナシ君。どうしようね？」

「おまえいたなら、呼びかけるよ」

「怒らないでよ。これから敵が出てくるから。そいつを倒すだけ。半数になったら、もう一つの世界にとばされて、残った同士がやるだけだよ」

「結局つぶし合うのか。自分のためにか。」

「つぶし合うのそんなに嫌いな？自分はつぶし合うのスキだな。自分ドSだから。」

二人が話しているときに、敵がきた。今度は、かなりでかい。石でできている。

「ゴーレムか。自分は倒すこと無理だな。牙折れちゃうかもしれないし、よろしくナナシ君」

「おいこら。てめえ。」

どうやってあいつを倒すのが問題だな。殴るか、殴つても壊れそうには見えないな。どうするか・・・

「危ない！ナナシ君」

ゴーレムの殴りかかった・手がもろに腹に当たった。

「ナナシ君・・・？」

ナナシは、すぐおきあがった。

「全然痛くねえぞ。これなら殴れる。」

五発ぐらいたたいてゴーレムを倒した。ナナシは

ーは思っていた。ゴーレムは、素手で殴って倒せる相手じゃないぞ。なんて体を持っている。ナナシ君。
「どうした？ー」
「なんでもないよ」
急に空間が割れ始めた。ナナシとーはそのなかに吸い込まれていた。
った。

第六章 第二次戦

起きたら、のどかで、平和なところだった。

「起きろ。ー」

「なに？」

「むこうに街があるぞ。行ってみようぜ。ー」

ーは思っていた。いままで友達などできなかった。自分にこうも話してくれる人。いつも誘ってくれたり。毎日が楽しくなった。

「ナナシ君。自分は君の友達だよね？」

「なんだよ。唐突に」

「答えてよ」

「答える必要ないだろ。こんなに話して、おまえのこと信じてここにきて。友達に決まっているだろ」

「そうだよね」

ーは笑った。

街までいくのに、とても時間がかかった。途中にはしゃべる花、前の世界じゃありえないことばかりおこっている。

「ふう。ついたね」

そこには僕らと同じぐらいの年の子ばかりいた。

「こいつらが参加者か」

「そのようだね」

あいつは、見覚えがある。龍崎！

「おい。龍崎。龍崎」

龍崎は人に紛れて消えていった。

「あいつはかならず龍崎だ。なぜここいる？あいつの傷害は、耳が悪いただけだろ。」

大きな声が聞こえた。

「わしが神様だ。」

見た目は、アフロでアロハシャツをきている。とてもバカに見える。

「あれが神かよ。いままであの世界無事でいたな」

「そうだね」

「この化物喪失ゲームに参加してくれてありがとう。ちなみに残った人数は、三十人。最大五人チームを作ってもらう。ただし、一人でも二人でもいい。五人を超えたらいかん。そして、チームで勝った全員の記憶もどしてやる。願いは一人一つだ。どうじゃ太っ腹だろ。チームを組んだら、第二次戦の説明しよう」

続々とほかのやつらは、人数を集めていった。

「おい。一どうする？だれかいれるか？」

「入れる必要あるの？自分の情報では、このゲームは、なんなるバトル。だからこれ以上は、入れる必要ないよ」

「いや、人数が多い方がいいと思うが。まあーが言うならいいよ。おまえを信じる」

なぜ？こいつが情報を知っている？まあ信じるしかできないけどな
すべてのチームが決まった。

「すべてのチームが決まったようだな。さてこのゲームチームごとに戦ってもらう。毎回対決するステージは違う。例をあげるが砂漠、廃墟いろいろじゃ。スポーツだけじゃないぞ。ルールは自由じゃ。殴っても蹴っても、力を使わなくてもいい。とにかく相手を気絶させる。質問は受けない。以上」

「合計八チームできました。トーナメントのくじをやってもらいます。引いてください」

次々と引いていく。ナナシらは四となった。

「では、明日から勝負は行いますので、十件 家があるので、チー

ムごとに今日は休んでください」

二人は談義にはいった。

「なあ、一。おかしくないか？」

「チームのこと？人数のこと？」

「どっちもだ。まずは、人数三十人だと。おまえがいつていたこと、違うと思うのだが」

「それはおかしいと思ってるよ。自分は半数だとおもっていいよ。けど半数より下だね。おかしいと思うよ。自分も」

「それにチーム、ハチーム？僕らで作ったから、一チーム増えるはずだ。だが僕らと一緒に、このルールを知っていたやつがいる。」

「そうだね。そいつらが本命だね。明日が楽しみだね」

「ああ、楽しみだ」

「今日はもう寝るぞ」

「おやすみ」

ナナシは、心の中では疑問があった。負けたら元の世界にもどれるのか。神様はなぜこれを思いついたのか？それが疑問に思って眠りつけなかった。

第七章 不安

初戦の相手は、五人だった。

「一、本命チームじゃないな」

「そうだね。ナナシ君」

「初戦の勝負の場所についてはからの楽しみじゃじゃ」

「だって、どんなところだろうね。ナナシ」

「そうだな。僕の力で相手の動きを止めればバトルでは勝てるが、地形によって変わるよな」

ワープさせられて、一と別々のところにとばされた。

初戦開始じゃ

周りを見た。周りは土で覆われている。なにもないところだ、まるで迷路のようだ。広いところに出た。ナナシは敵と出会った。

相手は二人か。微妙だな。あいつらの力もわからないし、一度相手止めると、次に力使えるのは、五分後だしな。いやーと決めたんだ。必ず勝つと。

ナナシは飛び出した。相手は振り向いた。相手が片方動いてなかった。いや違った。動けなかった。もうナナシが相手の一人の動きを止めていた。まずは一人、五、六発腹を殴って、飛ばして壁にぶつけて気絶させた。壁は崩れて、相手は土に埋まった。

「まずは一人。よっしゃ」

おい、仲間にどうした？起きあがれって相手は言うと思っていた。意外と冷静であった。

「おいおい。仲間が気絶したぜ。冷静にそんな風によく立っているな。」

「いや、あれは俺の力で作った、人形だぜ。貴様はたぶん力を使っ
て、あいつの動きを止めた。それは大正解だぜ。あいつは、壊れる
まですつと動き続ける人形だ。一対一だ。さあ楽しませてくれよ」

髪の毛が長いやつが叫んでいる。長いといっても、上に長い。金髪である。服なんて、真っ黒だ。

相手が素早く間合いにはいつてきた。そこから腹に殴られた。

（重てえ）

僕は飛ばされた。何もできなかった。ゴーレムに殴られて、全然痛くなかった。そして殴って倒した。僕は強いと持っていた。まだまだ弱いといまナナシは実感した。

「僕は、弱い。だから強くなる。そしておまえを倒す、おまえの力は、人形使い（パペットマスター）だな」

「よくわかったな。もう一つ教えてやる。人形作って壊されたら次に作れるのは、十分後だ。」

「じゃあ、ぼくの力もいうよ。相手を十秒間見ることで、一分間動きを止める。この力が使えるのは五分後だ。つまり僕の方が有利だ」
「じゃあ五分まで殴り合いだな。さあやろうぜ」

「いやだ。俺は五分間逃げ切ってまたここでやろうぜ」

「おい待て」

ナナシは風のように、去っていた。

さてこれからは、どうしようできれば、一とあっておきたいな。
角を曲がった。

「ナナシ君」

「――」

「さてこれからどうする？一、一人はパペットマスターだぜ。一度人形作ると、十分後までは、作れないらしい。もう五分経っているから、僕の力は使えるよ。」

「ナナシ君だいじょうぶだよ。相手は弱い。もう三人倒したから。自分の吸血鬼の力を使って、相手操って気絶させたよ」

一は、笑っている。僕は思った。こいつが仲間で良かった。吸血鬼は、日やニンニクや十字架に弱いけど、不死身何度もよみがえる。そして毒を注入する、血を吸うなどいろいろある。一が仲間で良かった。

「相手はあと二人さっさと倒そうよ。ナナシ君」

「おうよ」

僕が声を出したとたん、あたりが急に暗くなった。敵の声が聞こえる。

「ふふ、どうですか我が力侍は。ただの侍じゃない。亡霊の侍、我はその力を得る。つまり本物侍といっしょということだ」

「まっていたよ。パペットマスターの力を使って、操っているチームメイトだよ。すごいでしょ。こいつらも生ける屍。さあさっきの続きをやるうか」

ナナシは速攻で殴りにいく。それは、チームメイトのことを道具のように扱うことがむかついたからだ。

「ナナシ君。あせらないで、もつと落ち着いて。」

ナナシの意識がもどった。

「一すまない。ありがとう」

「さあいくよ。人形どもあいつを殺れ」

ナナシの右手が、人形達に当たった。そのとたん、人形達は倒れた。それは何かの呪縛から解かれたように倒れる。

「おいどうした？早く起きあがれ。俺を守れよ。人形ども」

「おまえは、殴ってその心直さないとだめだな。」

パペットマスターの力を持つ男は、飛ばされて壁にぶつかり、土が崩れて埋まり気絶した。

「おぬし、なかなかの強者だな。この剣と交わらないか。この剣は、生き物の血吸って強くなるのだよ。チームメイトの血も良さそうだし、そういつて、剣をチームメイトに刺した。」

ナナシがまたチームメイトを大切にしないことに怒り殴りに行くとした。そのとき、一が止めた。

「怒るのもわかるけど、頭冷やさないといけないよ。ここは自分に任せて」

一は、歩いていく。そして変身をしている、吸血鬼に。

「君の力は吸血鬼か、血がうまそうだ。この剣も君を切るのを、楽しみにしているよ。さあ早く戦おうよ。」

一が言った。

「くされ外道が。貴様の言葉は万事に値する。貴様は、一度心をいれかえて生まれ変われ、DEATH。」

僕には一が何をしたか、わからなかった。相手の口から血がどんどん出てくる。出血大量で死んだようだ。そこにいるのは、一ではなかった。一が怒るところなど始めて見た。このことは記憶に一生残った。

「勝者はナナシチーム」

相手が叫んでいる。それは、もう必死。なにをしてもそれを逃れたい。どうにかしてそれから逃げたいという気持ちを声に出しているようだ。

「死にたくない」

鳥肌がたった。死にたくない？なぜそんなことを、神様はなにかにいつていたか？僕が聞き逃していたのか？ナナシはただ自分に問い

かけるだけだった。

「ナナシ君だいじょうぶ？ 顔色悪いよ」

「一、だいじょうぶだ。だいじょうぶ・・・」

ナナシの心では、ずっと負けたくない。負けたら死ぬのか。ずっとそれしか考えられなくなった。一のことまで忘れてしまった。

第二戦目

「次の勝負の場所は、アスレチックじゃ」

「なんかおもしろそうだな」

「ナナシ君。おもしろいか、楽しそうに言い方に変えたら？」

「え、いや僕はこの言い方でいい。人に指図されるのは嫌いでね」

「ナナシ君って意外とプライドが高いの？ 始めて知った」

いやそうじゃない。僕はプライドが高いわけではない。心が・・・。

「どうしたの？ ナナシ君」

ナナシは無反応。一がナナシの頬をぶった。

「てめえなにしゃがる？」

「ナナシ君、どうしたの？ 昨日負けていった、人が言っていた。死にたくないのこと？ 負けたからどうなるとか考えていたらこれから大変だよ。負けたこと考えたらそうなるよ。もっと前向き行こう」

「一の言う通りだな。勝っていくか」

「それでこそ、ナナシ君だよ。」

ワープ今度は同じところにいた。

「二回戦開始じゃ」

周りを見た。特に変なところはない。天井があり、壁もある。まるで密閉の空間に閉じこめられた感じた。正方形の四角に入っている感じだ。

「特に変化はないな。一、敵の方に行こう」

「ナナシ君、危ない」

そこには床がなかった。さっきあった、床がなかった。右の方へ動いていた。下は真っ暗で、地面があるようには見えない。

「まさにこれぞ。アスレチックじゃろ。おもしろそうじゃろ」

「ナナシ君。楽しんでいこうよ」

ナナシは気づいた。始めに自分が言ったことを思い出したのだ。おもしろそうだと、そんなはずない。その気持ちを忘れてはいけない。

「私が行こう」

相手が力を使い始めた。

「私の力は、幽霊。つまり足が消えて、浮かんで自由に相手を殴れる。これほど私に有利なステージなどない。私たちの勝ちだ。ワハハハッハハハッハハ」

そのときだった。横を見たらすでに、一はいなかった。一はもう力を使って、吸血鬼の翼で空とんで、相手が変わる前に、相手の頭を蹴って落としていた。相手はがぁんとしていた。相手よりも僕がぁんとしていた。

「さぁナナシ君。早く倒そうよ」(おう)

相手はまだ四人いる。今度はナナシが見せた。猫の力を。猫はどんなに高いところから落ちてても着地ができる。目が光る。だがナナシが持つ力は化け猫の力。そう化けることができるのだ。

「見せてやる。俺の力を」

どんどん姿が変わっていく。それは狼。爪は伸びて手や腕、足は毛深くなって、目が鋭く、耳も上の方に生えて、二本足で立っている。

「すごいよ。すごいよ。ナナシ君」

一瞬うちに、うちにまだ力自体使っていない相手を、気絶させていった。狼は、一頭を相手に、群れで狩る動物、だがナナシが化けていた狼は少し違った。

「勝者は、ナナシチーム。だがつまらなかったぞ。もっとおもしろいものみせんか」

「次は決勝じゃ。勝ち残った組は、戻って休息をとると良い。明日が決勝じゃ」

「一もどるか」

「ナナシ君、うん」

後ろから声が聞こえた。二人は振り向いた。ナナシは一番に振り向いた。それは、聞き覚えがある声だったから

「龍崎！」

「あなたですね。私のことを叫んでいた人は」

「は、ということだ？おまえは僕のこと知らないのか？中学で友達だった僕を。」

ナナシは動揺した。それは獣がありえないことがおこると、おこすすぐさだった。

「知りません」

ナナシはショックを受けた。心の中で、なにかが砕け散った音が聞こえた・・・

「君はナナシ君と一緒に遊んでいたよね。話していたり、喫茶店に行ったりしていたよね？」

「覚えてません。我は、たった五日間しか生きてません」

え、五日間しか生きてない？ありえない。五日前ってなにかあったか？あった。僕が転校した日だ。

「そうか おまえ五日まえに記憶をなくしたな。」

一は、びっくりした。

「その通りです。我は、橘 龍崎しか覚えてなかった。それしか覚えてなかった。絶望と孤独がおそった。我はなんのために生きてるんだ。我は何者だ。耳も不自由で、この力しかなかった。我はここで生き残り、記憶を取り戻す。そう神様に言われたから。では」

龍崎は、去っていた。

「そんなの信じれねえよ。明日あいつと戦う、そんなのはいやだ」

「ナナシ君、そんな弱気はダメだよ。明日勝たないとだめだよ。願いごとで、彼のことを頼めばいいじゃないか」

「そうだな。今日はもうつかれた。明日決勝だから、今日はもう休むな。じゃあな」

だがナナシの心には、一の声は聞こえていなかった。ひどく動揺していたからだ。一に二回戦目みたいにしてもらっても、ダメな気がしていた。中学で始めて友達になった、相手に戦えというのか。「神様も残酷なことをしてくれるよな」

「それは違うよ。ナナシ君」

「一どうした？」

「明日、勝とう。ただそれだけ言いに来た」

ナナシは、一が何が言いたかったのかわからなかった。

第八章 決勝戦

「決勝戦じゃ楽しませてくれよ。今日の種目は、バトルじゃ。相手二人を気絶させたら勝ちじゃ」

「とてもシンプルじゃねえか」

「ナナシ君、倒しに行こうよ」

「一、すまない。僕一人でいかせてくれ」

「ナナシ君・・・」

ナナシはゆっくりと歩いていく。

「龍崎 僕のこと覚えているか？覚えているなら無言で縦に振ってくれ」

「前に言ったとおりだ。君のことは覚えてない」

龍崎は、大きなかまをだした。それはまるで死神が持つようなデスサイズ。

「ナナシ君逃げて、それに触れたら、意識が飛ぶ」

「え？」

「遅い」

龍崎は、躊躇なく切った。

「ナナシ君。ナナシ君。ナナシ君。ナナシイイイイイイイイ」

一の声は、もう一つの世界で、どこにいても聞こえるような。悲鳴だった。

「なんてことするんだ。君は大事な友達を切ったんだぞ。」

「我は覚えていない。悲しみなどない」

「許さない。絶対におまえは許さない。あとで記憶戻って後悔してもしらないよ」

一は、自分の力を使って、相手の背後に回って吸血した。

その理由はナナシを助けたかったから。デスサイズに、切られた人間は、意識が戻る方法は二つある。一つは、神様が直すこと。もう一つは・・・

「吸血鬼に、切られたデスサイズを持つ人間の血入れることだ。ナナシ君は、自分が助ける」

龍崎は、素早く相手に近寄るデスサイズを振り上げる。そのとき、動きが止まる。

「なぜ？動けない！」

「そうだよな。なにが残酷だ。一の言う通りだ。残酷など不幸など、この世界にはない。人間がただ思うだけ、自分が不幸じゃないかとそれは違う。決して違う。友達と戦うことが残酷か。倒したあとで救う方法があるのに、おかしいだろ」

「ナナシ君」

一は涙目になっている。やっとそれを思い出してくれたんだね。ただ僕は友達を救いたかった。それだけだった。だからこそ倒す。そして助ける。

「龍崎一度気絶しろ。そして俺が助けてやるからよ」

「勝ち残ったのは、ナナシと一じゃ。さあ願い事を言え」

「自分はね。記憶喪失の人全員の記憶を取り戻してほしい」

「ば、それは俺の願いだろうが」

「うるさいなあ。いいじゃん」

「わかった。じゃあおまえの願いはなんじゃ？」

「僕か。言われてしな、何にしよう」

一が言った。

「決まってるよね。君は友達を助けたいじゃないの？」

そうだ。僕の願いは、ただ一つ。

「この戦いに参加した人間を生き返らせてくれ」

「わかった。じゃあかなえるぞ」

「ああ」

龍崎が起きあがった。それゆつくりとそして僕の方を向いて、一言言った。

「ナナシ」

涙目ながらに言った。僕も一言言った。涙がでていてしゃべりにくくても大声で言った。

「龍崎」

二人は抱き合った。とても強く。二度と会えないと思っていたから。より気持ちがうれしかった。

「自分の記憶も戻ったしナナシ君は、とても親切だったな。ナナシ君じゃあね」

腕を捕まれた。

「まてよ。一緒に帰るぞ」

「え、なんで？」

「なんでだと、おまえが友達だからだろ」

一の目から涙があふれてきた。うれしい

「お兄ちゃんってこんなにきれいだったんだね」

ナナシの反応はびっくりしている

「自分も、記憶喪失だったんだ」

「よかったな。直ってよかったな」

「あのお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「自分の本当の名前は、海原 晶 双子の君の妹だよ。ねえ神崎純お兄ちゃん」

「僕も記憶が戻っていたけど。おまえだったのか、見た目がだいぶ変わっていてわからなかった。良かった再開できて、晶」

「へえおまえら兄弟だったんだな。純」

「おまえもそう呼んでくれるのか 龍崎」
三人は、もとの世界に戻っていった。

最終章 元の世界

あのできごとが終わって、あの力は使えなくなっていた。

「一生あの力はいらないけどな」

「お兄ちゃん。早く帰ろうよ」

「わかったよ。晶」

記憶が戻って良かった。龍崎とも仲良くいまも遊んでいる。そういえばあの勝負で、負けて言った人たちがどうなったんだろうか？

「きつと生きて楽しい暮らしをしている」

いままで長く続いた世界。これからもこんなスリルがあってもいいじゃないかと。いつも思っている。あんな力はいらないけど、いつか神様になったら、記憶喪失の人間呼んで、また、やらせようかな
「化物喪失ゲームを」

そして知ってほしいな。記憶の大切さを。いままで生きてきたことを思い出して、大切にしてほしい。記憶がないから不幸だ。残酷だ。なんて思わないでほしい。だからゲームをもういちどやろう。

そして、繰り返される化物喪失ゲーム。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742n/>

エンドレスゲーム

2010年10月8日14時44分発行